

平成21年7月30日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520022
 研究課題名（和文） 〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究
 研究課題名（英文） Philosophical Research on “I” from the Perspective of Language
 研究代表者
 上野 修（UENO OSAMU）
 大阪大学・文学研究科・教授
 研究者番号：10184946

研究成果の概要：

独在的〈私〉と独今的〈いま〉が非常によく似た仕方現実概念の根本にあることが明らかとなった。〈私〉と〈いま〉が世界のどの個人、どの時点を開關点とするかは偶然である。にもかかわらず、いったん開關されるとその特異点は諸個人のうちの一人物と歴史時間の現在に位置づけられ、特異性を失う。そしてこのことがむしろ現実性の条件となっている。このような二重性は、言語の使用者がまさにその使用によって言語世界の限界内に位置づけられる、その仕方によって理解されねばならない。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：独在的〈私〉、独今的〈今〉、現実性、指標詞、様相、クオリア

1. 研究開始当初の背景

背景には、永井均と入不二基義のそれぞれ独自のウィトゲンシュタイン研究と、上野修のラカン研究がある。これらの研究はかつてデカルトが「私はある」という命題によって提起した「比類なき私」という問題を共有する。青山拓央と古荘真敬は、それぞれ分析哲学、ハイデッガー研究の立場からこの問題に批判的に関わってきた。問題そのものの存立

の構造の究明が求められていた。

2. 研究の目的

本研究は主体性（主観性＝私であること）の哲学的な解明を行う。「私」という語は必然的に、そのように言うこの私を、そしてそ

れのみを指す。「私」は私がたまたまそれであるところの人物を指しているわけではない。その人物が私である必然性はないからである。また「私」はその語を用いる諸々の存在者からこの私を一事例として選び出すわけでもない。「私」というこの語の使用はさまざまなパラドックスを孕むことが知られている。本研究はこの問題を言語獲得における主体の開設・設立の見地から明らかにし、主体概念の核心に迫ろうとするものである。

3. 研究の方法

メンバーを中心にしたワークショップ形式での集中討議合宿。および関連研究者による数回の招待レクチャーと討議。最後に締めくくりとして、メンバーをパネラーとする公開シンポジウム。

4. 研究成果

(1) 2007年夏の山口ワークショップ

「独在論的な〈私〉」と時間の〈いま〉との関わりが共通の問題として浮かび上がってきた。今後の研究の方向づけを得ることができた。時間そのものの構造が〈いま〉の絶対的な指定を含むとともに、この〈いま〉は居並ぶもののない〈私〉が位置する絶対的な場所である。この〈私〉は〈いま〉を偶然的で、かつ、ある意味必然的な所与性（運命）として引き受ける位置にある。このように、時間論と独在論の関わりが今後の本研究の中心問題になるであろうという展望を得ることができた。

(2) 2008年春の研究会

議論は永井の〈いま〉と〈私〉の概念について、それぞれ時間（時制）の観点、および人称の観点から批判的に吟味することに充てられた。絶対的で純粋な〈いま〉における意志は実は事後遡及的な決定に浸食されてようやく同定されうるものになること、同様に、独在的な〈私〉は実は他者による〈私〉の読み替えに開かれ浸食されてでしか語られえないことが議論の中心となった。永井的な独在性・独今性は他なるものによってすでに侵されているのではないかという問題が浮かび上がってきた。

(3) 2008年夏の東京ワークショップ

引き続き、言語・時間および様相との関わりの中で、〈私〉の問題が議論された。とりわけ「私」という語が何を指示しているのか（アンスコム批判）、また「私」の指示のアプリオリな必然性（クリプキ）に関する問

題が、今後の検討課題として残ることになった。

(4) 2009年春の大阪シンポジウム

永井均に対して他の科研メンバーが問いかける形で公開シンポジウムを持った。永井の独在論的な〈私〉の孕む問題を指標詞的観点、および現実性の観点から研究討議し、議論を深めることができた。論点は多岐に渉り、要約を許さない。詳細は『〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究』、本科研費補助研究報告書、2009年（図書①）の「研究の記録」を見ていただきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計10件）

① 上野 修、「ライブニッツとスピノザ—現実性をめぐって—」、査読無し、『哲学の探究』、36. 2009, pp. 5-21.

② 入不二 基義、「瞬間と偶然—時間を哲学する—」、『思想』、1019, 査読無し、2009, pp. 77-99.

③ 永井 均、「現実性について」、査読無し、『精神科学』、No. 46, 2008, pp. 51-65.

④ 古荘 真敬、「「もののあはれ」と「自己触発」、査読無し、『哲学雑誌』、123/795, 2008, pp. 108-124

⑤ 上野 修、「出来事の時間—ドゥルーズのコンセプト—」、『時間学研究』、2号、山口大学時間学研究所、2008, pp. 65-70, 査読あり

⑥ 青山 拓央、「叱責における様相と時間」、『時間学研究』、2号、山口大学時間学研究所、2008, pp. 65-70, 査読あり

⑦ Ueno, Osamu, “Actuality and Necessity: Rereading Spinoza from a Modal Perspective”, *Philosophia Osaka*, 3, 2008, pp. 25-36. 査読無し

⑧ Irie, Yukio, “What’s Going on, When We Share Knowledge?”, *Philosophia Osaka*, 3, 2008, pp. 37-50. 査読無し

⑨ 入不二 基義、「時間のメタ様相と二つの運命論」、青山学院大学文学部『紀要』, 49, 2008, pp. 174-192. 査読無し

⑩ 入江 幸男、「『意識の事実』(1810)における諸自我と普遍的思考」『フィヒテ研究』第16号, pp. 2-19, 2008 査読無し

[学会発表] (計8件)

① 入不二 基義、「『死の捉え方』と『時間のメタ様相』」、時間学特別セミナー、2009年3月20日、山口大学時間学研究所

② 入不二 基義 他(木村 敏・小林 敏明・植村 恒一郎・斎藤 慶典)、《座談会》瞬間と偶然をめぐって、2008年8月29日、岩波書店

③ Irie, Yukio, " 'Our' Practical Knowledge" in The XXII World congress of Philosophy, Seoul National University, Seoul, Korea, July 30. - August 5., 2008.

④ 上野 修、「ライブニッツとスピノザー現実性をめぐってー」、哲学若手研究者フォーラム、2008年7月19日、国立オリンピック記念青少年総合センター

⑤ 上野 修、「スピノザと心理学ー彼らは身体に何ができるか知らない」、日本認知科学会分科会「教育環境のデザイン」、2008年5月10日、慶応義塾大学三田キャンパス西校舎

⑥ 青山 拓央、「タイムトラベルの論理」、イブニングセミナー2007 「宇宙・惑星的時間と認知的時間の多様性」、田町 キャンパスイノベーションセンター、2008年1月11日

⑦ 入江 幸男、「『意識の事実』における諸自我と共同自我」日本フィヒテ協会第23回大会、会長特別講演、2007年11月17日、大阪大学

⑧ Irie, Yukio, "Contradiction in the Question- Answer Relation" in The 13th International Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science, Tsinghua University, Beijing, China, August 9-15, 2007.

[図書] (計9件)

① 上野 修 (他)、『〈私〉の言語論的存立構

造の哲学的研究』、本科研費補助研究報告書、2009年、102ページ。

② 入不二 基義、朝日出版社、『足の裏に影はあるか?ないか?ー哲学随想』、2009年3月、240ページ

② 重田 謙、『ウィトゲンシュタイン哲学の成果と限界の検証』、科学研究費補助金若手研究スタートアップ報告書、2008年、72ページ。

④ 永井 均、岩波書店、『岩波講座哲学2 形而上学の現在』、2008, pp. 23-47

⑤ 上野 修 (他)、平凡社、『ドゥルーズ/ガタリの現在』、2008年, pp. 20-40

⑥ 辻 正二監修, 青山 拓央他7名(共著), 『時間学概論』, 恒星社厚生閣, 2008, pp. 29-51

⑦ 入不二 基義、筑摩書房、『哲学の誤読ー入試現代文で哲学する!』、2007年、304ページ。

⑧ 永井 均 他、岩波書店、『なぜ意識は存在しないのか』、2007年、157ページ。

⑨ 入不二 基義、勁草書房、『時間と絶対と相対とー運命論から何を読み取るべきか』、2007年、291ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 修 (UENO OSAMU)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号: 10184946

(2) 研究分担者

永井 均 (NAGAI HITOSHI)
日本大学・文理学部・教授
研究者番号: 20227979

入不二 基義 (IRIFUJI MOTOYOSHI)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 80263804

古荘 真敬 (FURUSHO MASATAKA)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号: 20346571

青山 拓央 (AOYAMA TAKUO)

山口大学・時間学研究所・講師
研究者番号：20432734

(3)研究協力者

郡司 へぎ才幸夫 (GUNJI YUKIO-PEGIO)
神戸大学・理学研究科地球惑星科学専攻・教授
研究者番号：40192570

小山 悠 (KOYAMA YU)
東京大学・大学院総合文化研究科・大学院生
研究者番号：なし

勝守 真 (KATSUMORI MAKOTO)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：00204446

中野 昌宏 (NAKANO MASAHIRO)
青山学院大学・総合文化政策学部・准教授
研究者番号：30315311

三平 正明 (SANPEI MASA AKI)
日本大学・文理学部・助手
研究者番号：60421145

山田 友幸 (YAMADA TOMOYUKI)
北海道大学・文学部・教授
研究者番号：40166723

重田 謙 (SIGETA KEN)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：30452402

入江 幸男 (IRIE YUKIO)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：70160075